

Title	観音松古墳の研究2：新発見の写真と図面からみた墳丘と主体部の形態と構造
Sub Title	Studies of the Kannonmatsu tumulus (2) : shape and structure of the mound and burial facilities through investigation of the rediscovered dry-plate films and drawings
Author	安藤, 広道(Ando, Hiromichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.335(335)- 378(378)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 論文 民族学考古学 挿図
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0335">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0335</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 観音松古墳の研究2

——新発見の写真と図面からみた墳丘と主体部の形態と構造——

安藤 広道

はじめに

前稿「観音松古墳の研究1」（安藤二〇〇九、以下「研究1」）では、前方後円墳時代前期の大型前方後円墳という以外、長らく詳細が不明であった観音松古墳に対し、二〇〇六年に実施した慶應義塾矢上キャンパス内の発掘調査の成果と、戦前の矢上台の地形図の分析に基づき、墳丘の形態と規模の推定を試みた。その結果、観音松古墳は、東北東に前方部を向けた、全長一〇一m、後円部径五五m、高さ一〇m、前方部幅四〇m、高さ五mの前方後円墳であったと推定でき、併せて墳丘の北側に、幅三〇m以上、深さ二m以上の大規模な周壕あるいは掘割を伴っていることが明らかになった。

「研究1」の発表後は、主に民族学考古学研究室に残

る主体部出土遺物の状態の確認とそれらの整理・分析を進めてきたが、これとは別に行っている研究室保管の写真や書類の整理作業において、期せずして観音松古墳の発掘調査時のガラス乾板と、主体部のトレース図や遺物の実測図などの図面類を発見するに至った。これらは、観音松古墳の墳丘や主体部について、多くの情報を引き出し得るきわめて重要な資料である。そこで本稿では、これらの新たに発見された資料を紹介するとともに、これらの資料に基づき、観音松古墳の墳丘と主体部の形態、構造について検討を加えることにした。

### 一 新発見の資料について

今回新たに発見されたガラス乾板は二三枚である。全て一〇八・四×一四九・四ミリ（4 $\frac{3}{4}$  × 6 $\frac{1}{2}$  in. 版）の乾

板で、「日吉 観音松古墳一」と「日吉 観音松古墳二」と書かれた二つの箱に、それぞれ十枚と十三枚収められ、フィルム類を集めた木製引出のなかに保管されていた。「二」の箱に入った一枚(写真1)を除き、全てパラフィン紙の袋に入っており、袋には写真の番号とタイトルが鉛筆で記されていた。

「二」の箱の写真には、「11」までの番号が振られているが、「7」を欠いていた。「二」の箱では、「12」までの番号が振られており、「7」が二枚ある一方で「8」が欠番となっていた。「二」の二枚の「7」は、墳丘断面の写真と主体部の写真であり(写真5と9)、「一」の箱に、墳丘断面の写真がまとまっていることからみて、墳丘断面のもの(写真5)が、本来の「一」の「7」だった可能性が高い。また、「二」で欠番となっていた「8」については、袋に入っていなかった写真(写真1)が、それに当たることと考えられる。

なお、これらのパラフィン紙に書かれた番号が、撮影順あるいは撮影対象ごとに整理されたうえで振られたものでないことは、写真の内容からみて明らかである。また、袋に記されたタイトルにも、後述するとおり誤りがみられる。こうした混乱の原因は不明であるが、今回発

見された遺物の実測図に一九四六年の日付があり、その実測図において、写真と同じ主体部の名称の誤りが認められ、一方で、一九五五年に記された清水氏の文章(清水一九五五)ではその誤りが解消されていることからすると、写真に番号を振ったのは遺物の実測と同じころ(遅くとも一九五五年以前)であり、その時点で調査時の情報が曖昧になっていたが故に、写真の順番やタイトルの誤記が生じたと考えることができそうである。

いずれにせよ、発見された写真を、箱ごとに番号順で示すことにそれほど意味はないため、ここでは、撮影された内容を検討したうえで、撮影対象ごとに整理して提示することにした(写真1〜23)。ただし、念のため、写真1〜23のキャプションの鉤括弧内に、箱番号とパラフィン紙に記された番号・タイトルも併記しておくことにする。

一方の主体部のトレース図や遺物の実測図などは、清水潤三氏関係の書類のなかから発見された。具体的には「實測圖類」と記された四切のX線フィルムの箱の中に、宝萊山古墳出土遺物の実測図、加瀬白山古墳や第六天古墳の遺物リストなどとともに収められていた。主体部のトレース図は、B5版のトレーシングペーパーに描かれ



写真1 観音松古墳全景（北より）「二（タイトルなし）」



写真2 「二-4 削平開始時の後円部」



写真3 後円部断面1「一-4 後円部住居址断面(一)(接近)」



写真4 後円部断面2「一-5 後円部住居址断面(二)」



写真5 後円部断面3「二-7 後円部盛土状態並住居址断面」

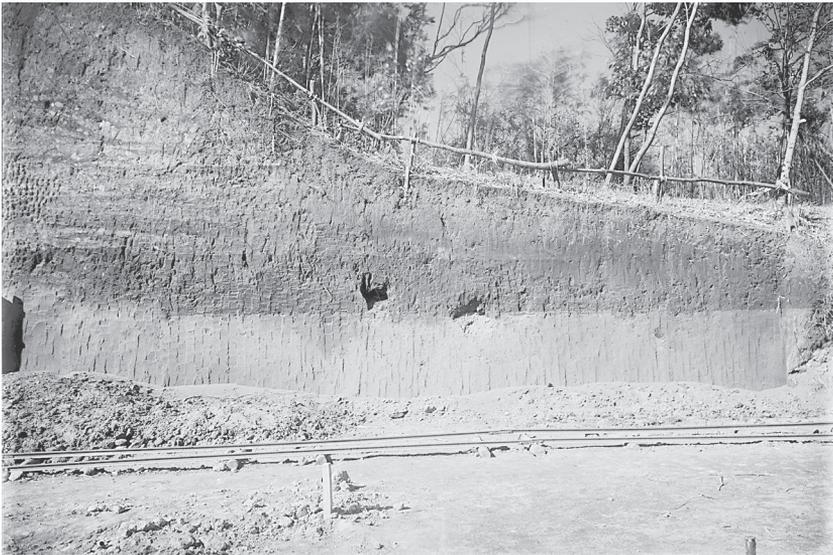


写真6 後円部断面4「一-10 後円部断面(鞍部)」



写真7 くびれ部1「一-1 紀(ママ:筆者注)念撮影」



写真8 くびれ部2「一-2 紀(ママ:筆者注)念撮影」



写真9 南粘土塚全景「二-7 西部粘土塚」



写真10 南粘土塚断面1「二-1 西部粘土塚断面(縦)」



写真11 南粘土礫断面2「二-2 西部粘土礫断面(横)」



写真12 南粘土礫断面3「二-10 西部粘土礫断面」



写真13 中央粘土槨全景（副葬品出土状態）「一-3 中央粘土槨遺物出土状態」

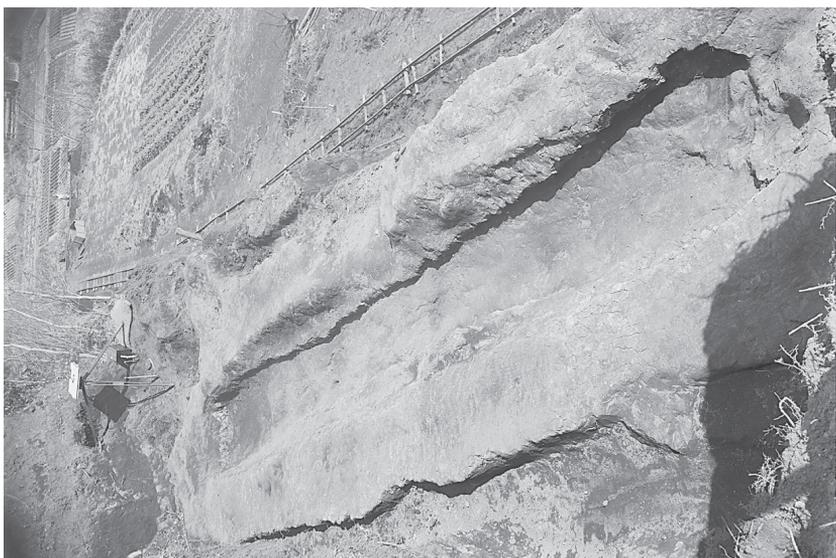


写真14 中央粘土槨全景（完掘1）「二-9 中央粘土槨」



写真 15 中央粘土槲全景 (完掘2)「一-8 中央粘土槲」



写真 16 中央粘土槲玉類出土状態「一-11 管玉出土状態 (中央槲管玉群)」



写真17 中央粘土槲鉄刀・玉類出土状態「二-6 中央槲鉄劍管玉出土状態」



写真18 「二-3 中央粘土槲断面」



写真 19 中央粘土礫銅鏃・砥石出土状態「二-12 遺物出土状態」



写真 20 中央粘土礫砥石出土状態「二-11 砥石出土状態」



写真21 南粘土層発見時? 「二-5 鞍部盛土断面?」



写真22 骨壺・墓誌出土状態 「一-6 墓誌出土状態」



写真 23 須恵器平瓶・弥生式土器「一-9 須恵 弥生式」

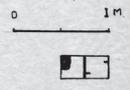
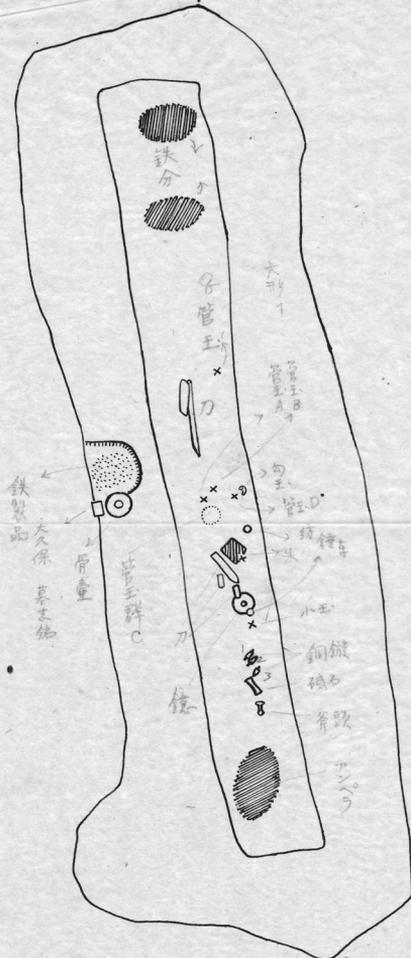
たもので、粘土槲や出土遺物は墨入れされており、鉛筆で個々の出土遺物の名称が加えられている(第1図)。  
右上には「日吉観音松古墳 粘土槲 實測圖」とあり、右下には清水潤三氏のイニシャルをデザイン化したロゴが描かれている。

実は、主体部のトレース図はもう一点存在する。ただ、こちらは、第1図とほぼ同じ内容のものであり、第1図に比して墨入れの線が太く、点描等も粗くなっている。また、鉛筆による名称の記入やタイトルもみられないことから、第1図をより簡略化して描き直したものと判断し、ここでの図示は控えることにした。

なお、主体部のトレース図には、年号や日付は記されていない。しかし、後述するように、主体部のトレース図にも、遺物実測図にみられる誤りに対応した、方位の違いが認められ、これらの図も、写真の整理と同様、情報が混乱していた時期の所産とみて間違いない。

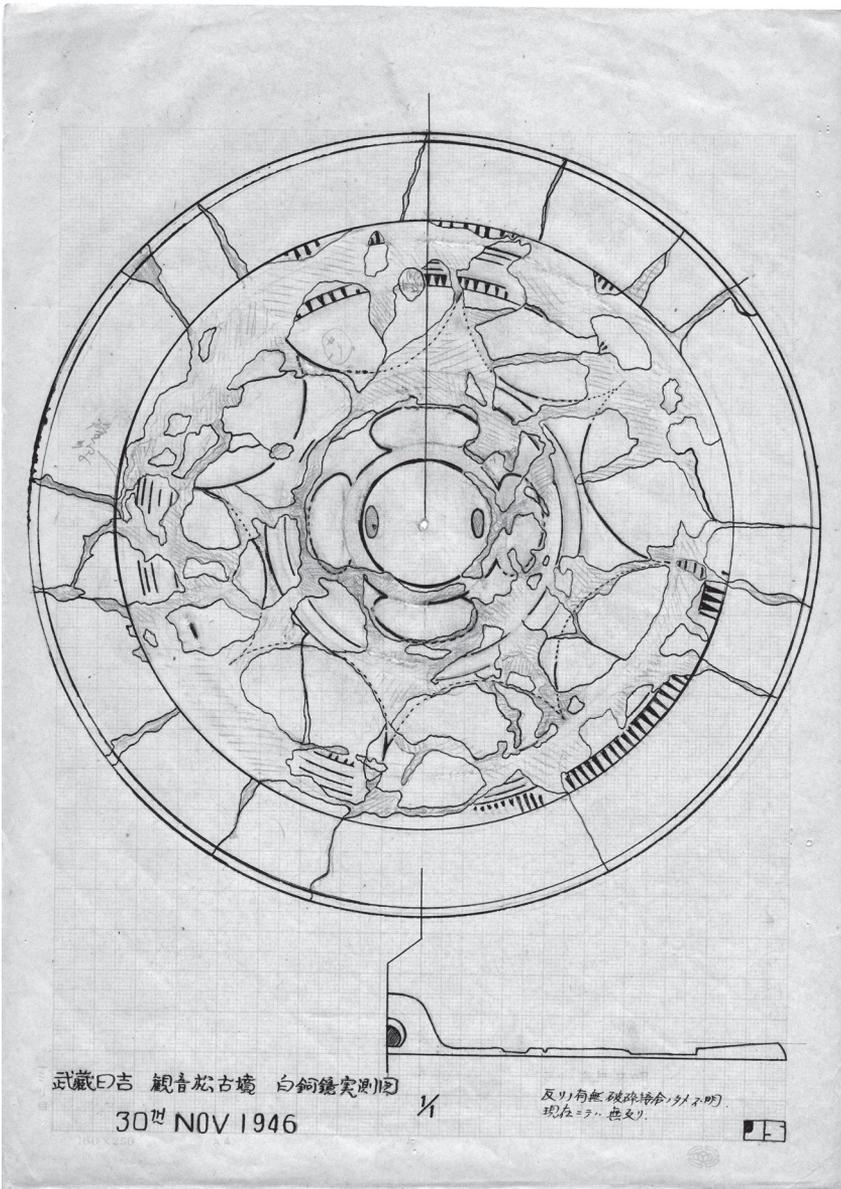
一方、遺物の実測図は二枚あり、ともにA4版の方眼紙に鉛筆で描いたうえで墨入れしたものである。一枚には、銅鏃、紡錘車形石製品、玉類が、もう一枚には内行花文鏡が描かれる(第2図、第3図)。ともに観音松古墳の出土遺物であることが明記されており、前者には一

日吉観音松古墳  
粘土柳 實測圖



第1図 中央粘土柳トレース図 (1/2に縮小)





武蔵日吉 観音松古墳 白銅鏡実測図

30th NOV 1946

4

反り角無 破砕場合不明  
現在ニテ 無アリ

F

第3図 内行花文鏡実測図 (1/2に縮小)



第4図 鉄斧出土状態メモ (1/2に縮小)

九四六年一〇月三〇日、後者には十一月三〇日の日付が記されている。なお、銅鏃、紡錘車形石製品と玉類については、これとは別にトレーシングペーパーに墨入れしたのも見つかったが、実測図以上の情報は含まれていなかったため、図示は控えることにした。

観音松古墳関係の図面としては、もう一枚、鉄斧の出土状態を記したメモのようなものがあつた。これも副葬品の出土状態、調査時の主体部の様子を推測するための重要な手がかりになるため図示しておく(第4図)。

## 二 観音松古墳の平面形の修正

「研究1」では、主に一九四一年測量の矢上台の六百分一地形図に基づいて、破壊前の観音松古墳の平面形を推定したが、この測量図に記録されていたのは、前方部北辺くぐり部後円部の一部のみで、この時点ですでに破壊されていた墳丘南側の情報は存在しなかった。そのため、墳丘南側のラインについては、残存部分の形態に近似し、かつ地形的にも矛盾のなかった山梨県甲斐子塚古墳の平面形を参考にして推定したのであるが(第2図破線)、今回発見された写真には、前方部南辺の位置を確定し得る、重要な情報が含まれていた。

二三枚のガラス乾板のなかで、前方部が写っているのは、写真7〜10の四枚である。これらを見ると、一九三八年の調査当時、後円部を切り崩した土砂を運ぶためのトロツコの線路が、前方部の墳裾に沿って、一直線に敷設されていたことが分かる。特に写真10には、その様子が明瞭に写っているが、この写真で注目したいのは、その線路を伸ばした先の風景である。つまり、線路の直線上に写っている対象物の平面上の位置を、地形図や航空写真で確定することができれば、観音松古墳の前方部南



写真24 米軍撮影の航空写真（USA-M372-15）にみえる観音松古墳

辺の方向が明らかになるからである。

そこで、写真10の線路の先を直線的に伸ばしてみると、矢上川を越えたあたりに大きな屋敷があり、その屋敷の生垣のコーナーが、線路の直線上に正確に乗ることがわかる。近い時期に撮影された航空写真を幾つか入手し、この生垣のコーナーを探したところ、一九四七年に米軍が撮影した航空写真において、この生垣のコーナー（A）が明瞭に写っていることが明らかになった（写真24）。

写真24の航空写真を、周囲の道などを手がかりに、現在の矢上台一帯の地図に重ねて縮尺と座標を確定し、「研究1」で示した観音松古墳の全体図に重ね合わせるのが第5図である（「研究1」では全体図を日本測地系の座標値で示していたが、第5図では世界測地系に直してある）。これを見ると、まず、写真に写った観音松古墳の墳丘残存部分が、一九四一年測量の残存部分の等高線と見事に一致しており、一九四一年の地形図の正確さを確認することができる。一方、「研究1」で推定した後円部の外周ラインに目を向けると、推定ラインに沿って、樹木（植物）が並んでいた様子が写っている。地形図では、この付近に墳丘は残っていないことになってい



第5図 破壊前の墳丘の復元

三五四 (三五四)  
るが、写真に写った植物の列の存在は、墳丘が削られた後も墳裾部分の植物が伐採されずに残っていたことを物語っているとみてよさそうである。仮にそうだとすれば、これにより、「研究1」で推測した後円部径(五五m)の妥当性も、より高まったと言える。

このように、「研究1」における墳形の推定は、概ね正確だったと評価できるが、手がかりのなかった前方部南辺については、今回の写真により修正が必要になった。つまり、写真24と第5図において、写真10を写したと思われる、後円部頂

部のやや南に寄った位置から、トロッコの線路の直線上に位置する屋敷の生垣コーナーに向って直線を引くと、トロッコの線路が「研究1」で推定した前方部南辺の位置よりかなり南にずれ、それと平行する破壊前の前方部南辺のラインも「研究1」の推定よりも大きく開くことになるからである。

そこで、後円部の位置と径、前方部北辺の位置をそのままにして、トロッコの線路の北1mの位置に前方部南辺のラインを引き直すと、第5図の一点鎖線のようになる。先述のとおり、後円部の位置と径の推定は問題なさそうであるため、今回、前方部南辺の位置を確定し得たことで、破壊前の墳丘の形態を、ほぼ正確に復元できたことになる。この場合の墳丘の規模は、全長約一〇〇m、後円部径約五五m、前方部幅約五〇m、くびれ部幅約二二mとなる。ただし、後述するように、六百分一地形図や航空写真にみられる北側の墳裾は、深さ二m以上の掘り割りが埋没した状態のものであり、標高も二二・五〇・五m程度と考えられるのに対し、南側では破壊前の墳裾の標高が一九m前後であった可能性が高いため、本来の北側の墳裾は、地形図や写真よりも若干外側に位置することを考えておく必要がある。

以上のように、依然僅かな不確定要素が残っているものの、今回の写真の発見によって、破壊前の観音松古墳の平面形を、かなり正確に復元できるようになった。そこで試みに、復元された平面形と相似する可能性のある古墳を探してみると、奈良県渋谷向山古墳（三分の一）、同県宝来山古墳（五分の二）、宮城県雷電山古墳（五分の三）などと近似することがわかる。また、近接する加瀬白山古墳の測量図を一・一倍にしたものとも比較的良好一致するようである。前方後円墳の築造企画を含めた墳丘の型式学、系統論には、依然大きな意見の相違がみられるため、「相似」の判断には慎重にならざるを得ないが、いずれにしても前期後半～末葉に位置付けられる諸古墳のプローションに近似することは間違いなさそうである。とりあえず、今はこうした推定で満足しておくほかならう。

### 三 後円部の墳丘断面からみた墳丘構築方法

#### a. 墳丘断面の位置

さて、今回発見された写真の中に、後円部の中央付近の墳丘断面を写したものが複数含まれていることも非常に重要である。写真3～6がそれに当たるが、特に断面

の西側については、盛土の観察をするために断面を平らに削ってから撮影したようであり、それにより、盛土の様子が非常によく分かるようになっていた。全国的にみても、墳丘長一〇〇mクラス以上の前方後円墳の後円部断面がここまで明瞭に観察できる事例は皆無といつてよく、その意味で、これらの写真は、大型前方後円墳の構築方法を研究するうえで他に例をみない貴重な資料といふことになる。

写真3〜6及び10と14を見ると、後円部の断面の下にも、断面と平行するように、トロツコの線路が敷設されていたことがわかる。ただし、断面下端と線路の距離は、前方部墳裾と線路の間隔より大きくなっていたようである。また、写真10、14を見ると、前方部側では墳裾に沿って直線的に伸びていた線路が、くびれ部付近で緩やかに南に折れていたことがうかがわれる。

一方、墳頂部に目を向けると、主体部の調査のために掘りくぼめた箇所が写っており、そのくぼみの底の部分に、明るく写った薄い土層がみられる。また、この明るい土層が、サブトレンチ状のくぼみによって四〜五箇所切られていることもわかる。この様子は、写真10、11に写った状況と一致しており、くぼみの底に写った明るい

土層は、後述する中央の粘土層の南に存在した、もう一つの粘土層(南粘土層)の粘土と考えてよさそうである。中央粘土層とこの粘土層の位置関係の記録は残っていないが、写真15の主体部左上方に、この粘土層の北側の肩が一部残っているのが確認できる。つまり、仮に中央の粘土層が墳丘の主軸上に存在していたものとすれば、もう一つの粘土層に接していた墳丘の断面は、後円部中央よりやや南にずれた位置にあったことになる(第6図)。

以上の手がかりを総合して、写真に写った後円部の墳丘断面の位置を推定したのが、第5図の斜線部分である。この推定が正しければ、墳丘の主軸とはややずれているものの、写真3〜6には、後円部の中央付近を通る墳丘断面が写っていることになる。

#### b. 墳丘断面の大別層位

これらの写真を西側(写真3)から順番に並べてみると、写真5と写真6の間に、僅かに写っていない断面があるものの、墳丘の西端からくびれ部までの墳丘断面を、ほぼ通して観察することが可能になる。そこでまず、その全体的な特徴を俯瞰してみると、先述のとおり墳頂部や断面東側が不明瞭となるが、西端からくびれ部まで、



写真25 盛土の大別層と塚状盛土単位

墳丘断面をほぼ水平方向に五つの層（構築段階）に区分し得る、不整合的な土層の境界ラインが四本存在することがわかる（写真25）。

その一番下のラインは、旧地表面と考えられる。写真を見る限り、墳丘構築時に旧地表面を加工あるいは攪拌するような基盤整地の工程（樋口一九九七・二〇八頁）はなかったようである。その下は、旧表土の黒色土と後述する堅穴住居址等の断面を挟んで、厚いローム層に移行する。ローム層には、深めの堅穴住居址の床面のレベルからやや下がった位置に暗色帯が認められ、断面の最下段に近い箇所で、再び暗くなっていることがわかる。

これらの暗色帯は、武蔵野台地V層とVII層に相当するとみていい。トロッコの線路のある面は、前方部の墳裾とほぼ同一のレベルかやや高くなっていたと考えられるため、観音松古墳は、まず周囲の地形を、武蔵野台地VII層付近まで深く削り込んで、墳丘の最下段を造っていたと推測することができる。ちなみに、二〇〇七年の発掘調査で確認した前方部北側の大規模な掘り割りも、武蔵野台地VI～VII層まで掘削したものと推測されるため（安藤二〇〇九・一〇六頁）、墳丘の南北で、ほぼ同じ程度の深さまで旧地表面を掘削し、墳丘最下段を形成していた

ことになる。

残念ながら、写真から具体的な掘削深度を明らかにする手がかりを得ることはできなかつたが、日吉台、矢上台では、Ⅲ層上面からⅦ層上面までの層厚が約一・五～二mとなることが多いため、その上の旧表土の黒色土層を含めると、墳丘構築時の掘削深度は、二～二・五m程度に達していたと想定される。前方面北辺におけるⅦ層の標高は一九m前後であつたため、トロッコの線路と前方面南辺の墳裾の標高も、一九m前後と考へて大過ないだろう。

なお、墳丘基盤の掘削深度が二～二・五m程度だとすると、写真4と5を見る限り、「研究1」で推定した、後円部高一〇mという数値の蓋然性も高まってくるようである。写真1には、前方面の東端を除き、観音松古墳の墳丘のほぼ全体が写っているが、木の合間から確認できる後円部墳頂の高さと墳丘長との比率からみても、墳丘北側で八～九m(南側では一〇m以上)の高さが想定できることになる。なお、前方面の高さについては、あまり手がかりがないが、「研究1」で想定したとおり後円部に比してかなり低く、北側からみて三～四m、南側からみて五m程度と考へられる。

さて、旧表土より上は盛土となる。盛土部分は、大きく四つの層に大別できるようであり、ここではこれらを、下から第一段階～第四段階の盛土層と呼んでおきたいと思う。こうした段階的な盛土層の単位は、これまで「板(プレート)状の盛土」(樋口一九九七・二二二頁)、「壇状の盛土」(青木二〇一三・八二頁)などとされてきたものに相当すると考へられる。大別層の境界面は、「平坦面」(青木二〇一三・二五頁)や「工程面」(小池二〇〇六・四頁)などと呼ばれるが、観音松古墳の盛土の境界面は、いずれも整った水平面とは言えず、高低や傾斜がみられるようである。また、各段階の厚さもさまざまであり、特に第二段階の盛土層が厚くなっているのが特徴である。

#### c. 塚状盛土と盛土全体の構造

盛土の大別層のうち、第一段階から第三段階の盛土層には、中央付近に塚状の盛土単位が存在する。墳丘構築時にこうした塚状の盛土単位を構築していたと推測される事例は多く、これらを「小丘」と呼ぶことが提唱されている(樋口一九九七・二〇八・二〇九頁)。ただし、観音松古墳のように墳丘の中央付近のものだけを「小



写真 26 後円部西側の墳丘断面の土層区分



写真 27 後円部東側の墳丘断面

丘」と呼ぶ意見もあり(青木二〇〇三:二五頁)、これは東日本に多い工法と考えられている。写真5では、各段階、特に第一段階と第二段階の塚状盛土単位の様子が非常によく観察できるが、ここでは、断面台形の塚状盛土単位が、幾重にも重なっている状況が見て取れる(写真25)。

これらの塚状盛土単位の平面形は不明である。しかし、断面を見る限り、観音松古墳の塚状盛土は、前段階の単位を覆うように(例えば同心円状に)規則的に重ねられているわけではなく、横方向に拡張するように積まれたり、斜面部分に追加されたりと、かなりランダムなあり方を示している。そうした工程からみて、これらの塚状盛土単位の平面形が、整った円形や方形に成形されていたとは考えにくそうである。使用される土も、ローム主体のものから黒色土主体のものまでさまざまであり、積み方にも、水平の土層単位を重ねるものから、塚状盛土全体を均質の土で構成するものまでの違いがみられる。ただし、それぞれの塚状盛土単位の頂部には、いずれも平坦面が作り出されており、また斜面部の傾斜面も急で、裾部分を除いて直線状を呈する箇所が多いため、盛土の単位ごとに、それぞれの断面が台形になるように突き固

められていたことが推測される。

こうした不規則な塚状盛土単位の積み方は、技術の未熟さを示しているようにもみえなくはない。しかし、それぞれ意図的に断面を台形状に整えていることに着目すれば、こうした積み方に何らかの地盤工学上の意味があった可能性も考えられる。今後の検討課題である。

なお、第四段階の盛土層にこうした塚状盛土単位が見られないのは、断面が乾燥して見づらくなってしまうている可能性のほか、本来的に存在しなかった可能性、また主体部の掘り方の断面が見えている可能性などが考えられる。観音松古墳と時期の近い、比較的大型の円墳である千葉県大厩浅間様古墳では、三、四段階の大別層が確認されているが、観音松古墳に類似した不規則な積み方の塚状盛土単位群が複数段にみられる一方で、主体部のある最上段にはそれが認められないようである(市原市文化財センター一九九九:第17図)。また、定期的にやや廻る推定全長六〇mの前方後方墳とされる千葉県新皇塚古墳でも、二段階の盛土の下端に規模の大きい塚状盛土が認められるものの、主体部のある上段には、これが形成されていなかったように見える(房総考古資料刊行会一九七四:第I-4図)。こうした例からみて、観

音松古墳の第四段階の盛土にも、中央の塚状盛土は存在しなかった可能性が高いと考えておきたい。

さて、中央の塚状盛土から墳丘縁辺にかけての盛土層の様子については、写真3、4から詳細をうかがい知ることがができる。第三段と第四段階の盛土層は、乾燥もあって不鮮明になっているが、第一段階、第二段階については、細かな土層の単位まで、非常に明瞭に読み取ることが可能である。

写真26は、写真4のコントラストを上げたうえで、土層を可能な限り細かく分層したものである。これを見ると、塚状盛土単位群以外の盛土は、塚状盛土単位部分より薄い土層の単位で構成されていることがわかる。その積み方は一様ではないが、全体的にみて塚状盛土単位群側からの盛土が先行し、次いで墳丘縁辺の盛土を行い、最後にその間を水平に埋めていくという順序で構築されているようである。

墳丘縁辺付近には、第四段階の盛土層を除き、墳丘外側から内側に向かって傾斜するように土が積まれている様子が認められる。特に第一段階の盛土層では、その状況が明瞭に写っており、所謂「土手状盛土」（青木二〇〇三・二五頁）の存在を想定できそうな状況である。た

だし、この部分の盛土は、墳丘内側と同様に土層単位が薄く、かつ塚状盛土部分のように頂部や斜面が整えられた様子も見られないため、土手ではなく、単純に盛土の順序が見えているだけである可能性も否定できない。

なお、塚状盛土単位群の外側の盛土は、最下段よりも二段目のほうが、ローム粒、ロームブロックを含む土層の割合が高くなっているようである。これは、墳丘の最下段や周壕を形成するために掘り下げた土を盛土に使用していたことを示していると考えていいだろう。

#### d. 墳丘構築方法の評価

近年、古墳の墳丘構築方法の研究を精力的に進めている青木敬氏によると、墳丘構築方法は、土手状盛土を伴う壇状の盛土、墓壙をもつ埋葬施設を特徴とする「西日本工法」と、小丘を核とする非壇状の盛土と無墓壙の埋葬施設が特徴の「東日本工法」に大別できると言う（青木二〇〇三・四〇頁、二〇一三・八二・八三頁）。青木氏は、両者の技術的な系統を弥生時代の墳丘墓にまで遡らせ、前方後円墳時代前期では尾張・越前以西と三河・加賀以東で両者の分布が明瞭に分かれる一方で、前期末葉以降、東日本に「西日本工法」が浸透するとし

ている。

観音松古墳は、複数段階の盛土の大別層、つまり壇状の盛土がみられ、壇状の盛土の厚さに対応する土手状の盛土が存在するようにみえる点などからすると、氏の「西日本の工法」によつて構築されていると言えなくもない。しかし、その一方で、比較的大型の塚状の盛土が墳丘の核になっていることや、塚状盛土単位群側の盛土が、塚状盛土の斜面と同様に傾斜している点などは「東日本的」であるように見える。

前期末という時期を考慮すれば、観音松古墳の墳丘断面は、青木氏が言うように、東日本に「西日本の工法」が浸透し始めたころの様相を示すものとの評価も可能である。先述の大厩浅間様古墳の墳丘断面は、土手状盛土を伴う壇状の盛土とその中央に見られる不規則な積み方の特徴の盛土などからみて、現状で最も観音松古墳の断面に類似したものと評価することができ、青木氏はこの大厩浅間様古墳を「西日本の工法」に分類している。しかしながら、青木氏の分類が、古墳の墳形や立地・規模の差、墳丘断面の場所の違いなどをあまり考慮していないことや、大型古墳の場合、根柢となっている資料のほとんどが、墳丘（特に墳裾）のごく一部分の断面で

あることなどに疑問がないわけではない。そもそも盛土の厚さが大きく異なる大小の古墳では、用いられる技術に違いがあつて当然であるし、前方後円墳や前方後方墳の場合、平面形や高さの違いがみられる前方部と後円部で異なる工法が用いられていても不思議ではない。また、規模や時期が近くても、丘陵頂部などに立地し墳丘の大半を削り出しによつて構築した古墳と、平地や台地に立地し墳丘を盛土によつて構築した古墳では用いられる技術に大きな違いがあるはずである。つまり、粘土礫をもつ前期中葉以降のほぼ同規模の前方後円墳同士であつても、東京都宝来山古墳の前方部の断面と観音松古墳の後円部の断面の比較には慎重な姿勢が必要であるし、削り出し主体の神奈川県長柄桜山1号、2号墳と盛土主体の観音松古墳の工法を同列に扱つても意味はないということである。

また、それぞれの工法に特徴的な要素とされるものについても、もう少し慎重な検討が必要のように思われる。例えば、「西日本の工法」の重要な要素とされる、土手状盛土を伴う壇状の盛土についてみると、青木氏が「東日本的工法」の典型例とした新皇塚古墳においても、筆者には、墳丘外側から傾斜する土手状の盛土が存在し、

かつそれが盛土の大別単位と関係しているように見える。一方、前期初頭に遡る「西日本の工法」の事例とされた京都府元稻荷古墳の後方部では、墳裾から約1m、高さ約4mという比較的大きな土層断面が調査され、墳丘外側から繰り返し土手状の盛土がなされている様子がみられるものの、壇状の盛土とみなし得る平坦面は確認できないようである（向日市教育委員会・（公財）向日市埋蔵文化財センター二〇一四・五五頁）。

これらの是非はともかく、仮に墳裾部分のごく一部の墳丘断面で土手のような盛土が認められたとしても、そこから壇状の盛土の有無を判断することはもちろん、工法を大別することには無理がある。蛇足かも知れないが、土手状盛土自体は、弥生時代中期後半の静岡県手越向山遺跡の方形周溝墓にすでに存在しており（安藤二〇一四・四三九頁）、ここでは墳丘構築前の階段状の整地も認められる。弥生時代においても、立地に応じた複数の墳丘構築技術が存在していたのであって、単純な要素の有無、あるいは組み合わせで技術系統が大別できるわけではないのである。

一方、「東日本の工法」の特徴とされる中央の塚状の盛土（小丘）についても再検討が必要である。例えば、

畿内中枢の中期古墳である大阪府唐櫃山古墳の後円部には、中央に比較的規模の大きな塚状の盛土が存在し（大阪府教育委員会二〇一〇・九・十頁）、また、京都府椿井大塚山古墳後円部墳頂付近の高さ約3mの崖面においても、塚状の盛土単位が認められ、かつそのあり方が観音松古墳によく似ている（山城町教育委員会一九八六・一二頁）。つまり、観音松古墳にみられる墳丘中央に塚状の盛土を構築する工法は、東日本の技術的系統というよりも、むしろ西日本の前期古墳、特に大型古墳において発達したものである可能性も考えておかなければならないのである。

いずれにせよ、前期に限らず大型の古墳については、その構築方法についての情報があまりにも少なく、現状では、その具体的な時空間上の展開を詳述できるところまでには至っていないようである。とはいえ、墳丘断面についてのこれまでの断片的な証拠を見渡す限り、観音松古墳にみられる個々の墳丘構築技術は、西日本を含めた広い範囲に認められるものばかりであり、大型の前方後円墳の技術として、決して特異なものではないと言うところまでは許されるであろう。それを「西日本の工法」と呼ぶかは別にしても、前期のある段階までに、お

そらく畿内地域で確立した盛土主体の墳丘構築技術が、粘土礫を主体部とする大型前方後円墳が広く展開する前期後半までに、東日本にも影響を及ぼすようになっていたことは充分想定できそうである。もちろん、具体的な議論は今後委ねなければならぬが、今後、そうした墳丘構築方法の時空間的展開を検討するうえで、観音松古墳の墳丘断面の写真が大きな意味を持つてくることは疑いないだろう。

#### 四 主体部の位置と構造

##### a. 南粘土礫

「研究1」で紹介した、一九五五年の清水潤三氏の文章によると、観音松古墳には、二つの粘土礫、つまり「中央」の「大型頑丈につくられた粘土礫」と「南側に偏り」、中央のもの「より上方」の粘土礫があったことになっている(清水一九五五・三頁)。ここでは、それぞれを中央粘土礫、南粘土礫と呼んでおくことにするが、今回発見された写真にも、この記述に対応するように、二つの粘土礫と思われる主体部が写っている。写真13、20が中央粘土礫、写真9、12が南粘土礫である。

なお、パラフィン紙の袋に記されたタイトルや、第2

図の遺物の出土場所の表記では、南粘土礫が「西部粘土礫」や「西」と表現されているが、これは誤りである。写真9、12に写った「西部粘土礫」が、写真15の中央粘土礫よりも浅い位置に存在していたことは間違いなく、更に写真15の中央粘土礫の左には、一段高く掘り残された部分があり、そこに写真11によく似た粘土礫の断面の一部が見えている。こうした点からみて、写真9、12の粘土礫が、中央粘土礫よりも墳丘切り崩し側、つまり南に存在していたことは確実である。

さて、南粘土礫については、実測図等の記録がみつかっていないため、位置及び形態・規模は写真から推測せざるを得ない。先述のとおり、写真5の墳頂部の掘削が、写真10の状況だとすると、南粘土礫は、後円部中央付近の、墳丘断面に接する位置に存在していたことになる。写真5の旧地表面下の削り出しの高さを二・五m程度と仮定した場合、墳頂付近が画角の上方に写っていることを考慮すれば、この時点での墳頂部の掘削は、一mを若干超える程度と推測される。なお、中央粘土礫を写した写真15には、先述のとおり南粘土礫の一部が写っているが、これをみる限り、中央粘土礫の粘土範囲の南辺から一m前後南に南粘土礫の棺床の北辺が位置していた



第6図 主体部の位置

ようである。また、中央粘土礫と南粘土礫には、1m程度の比高差があったこともうかがわれる。

規模については、まず写真5によると、この時点での墳頂部の掘削範囲の長さ、七〜八m以上に達していたことは間違いないであろう。粘土礫全体を写した写真9と10がこの掘削範囲の西壁上から撮影されていること、また写真5において粘土層と思われる薄く明るい土層が掘削範囲の床面全体に及んでいるようにみえることからすると、南粘土礫の粘土は、この掘削範囲全体に広がっていた可能性が高い。

写真9、10には、棺床として調査されたと思われる浅いくぼみが写っている。これは木棺の形態や規模を推測するうえで重要な手がかりとなるが、全体的に湾曲しているようにみえるのは不思議である。ただ、写真10の棺床部分の断面をみると、奥と中間の二本のサブトレンチには、薄いながらも粘土のみの棺床が形成されているのに対し、手前のサブトレンチには、ブロック状の粘土がみられるだけであり、この部分まで木棺が存在していたかどうかは疑問である。中間のサブトレンチのやや西まで、比較的床面が明るく写っていることからすると、この辺りを棺床の西端と考えるのが妥当かも知れない。

一方、奥側のサブトレンチ付近では、南側の粘土がくぼみの内側に大きくせり出すことで湾曲しているようにみえていることがわかる。しかし、対する北側のくぼみの肩があくまで直線的であることからすると、南側の粘土のせり出しは、崩落した被覆粘土である可能性が考えられることになる。なお、棺床の東端は、写真12から、掘削範囲の東壁より1m前後の位置にあったと推測される。以上のことから、南粘土礫の棺床は、五〜七mの規模と推測することができそうである。なお、南粘土礫の主軸方向を推測する手がかりは少ないが、写真9、10な

どをみる限り、直下のトロッコの線路とほぼ平行していたようであり、同じく線路とほぼ平行していたと考えられる(写真14など)中央粘土礫とも、平行関係にあった可能性が高い。

写真10〜12には、南粘土礫の断面が写っており、棺床及びその下の構造の一端をうかがうことができる。これらを見ると、棺床の粘土は薄く、中間のサブトレンチ付近で棺床の両サイドが若干厚くなるものの、一〇cmに満たない程度の箇所が多かったことがわかる。棺床の断面形は、浅くくぼむ程度の舟形を呈しており、中間のサブトレンチ付近では床が平坦になっているようにもみえる。ただし、これが木棺の形態を示しているかどうかは不明である。こうした薄い粘土による舟形の浅い棺床は、隣接する加瀬白山古墳の前方部粘土礫にもみられる(三田史学会一九五三…圖版第四)。

一方、東側のサブトレンチの断面には、棺床の粘土の下に粘土ブロックを含む薄い土層があり、その土層が棺床の北側にも若干凹みつつ延びている様子が写っている。この土層は、中間のサブトレンチにも認められ、棺床の外と推定した西側のサブトレンチにもみえている粘土ブロックを含む層も、一連のものである可能性が高い。つ

まり、南粘土土槨では、棺床を形成する前に、木棺よりかなり広範囲に、粘土ブロックを含む土を薄く敷き、木棺を設置する部分を若干窪ませてから粘土を貼って棺床を形成していたと推測される。ただし、墓壙の有無については、今回の写真からは判断できなかった。なお、棺床の北側で粘土ブロックを含む土層が若干凹んでいるのは、中央粘土土槨の木棺の腐朽崩落によるものである可能性があると考えられる。

遺物については、清水氏の実測図では、第2図に「西」と記された白玉の図があるのみである。研究室には、同じく「西」と記されたラベルのついた一八点一連の白玉が存在するが、第2図の白玉はこのうちの一点であると思われる。いずれにしても、副葬品は少なかったようである。

#### b. 中央粘土土槨

##### ・位置と構造

中央粘土土槨は、第1図の発見によって、規模や形態を知ることができるようになったが、ここではまず、第1図の方位の誤りを修正することから始めなければならぬだろう。南粘土土槨のところでも述べたとおり、観音松古

墳の二つの主体部が、墳丘断面とほぼ平行していたことは間違いないため、この図の方位は明らかに誤っている。とはいえ、方位記号が記されていることからすると、そのズレは九十度単位であることも考えられ、この図を描いた時点で清水氏が方位を左に九〇度、つまり本来北であるはずのところを東と勘違いしていた可能性が想定できることになる。ただし、第1図の方位記号が、磁北のままか、真北に直したものかはわからない。一応ここでは真北として考えておくことにするが、いずれにせよ、南粘土土槨を「西部粘土土槨」と呼んだ元凶が、この方位の勘違いにあったことは間違いないさそうである。

続いて、主体部の位置の検討に移ることにするが、中央粘土土槨が観音松古墳の第一主体部であったとすれば、多くの前期前方後円墳と同様、ほぼ後円部の中央に位置していたと考えるのが妥当である。そこでここでは、中央粘土土槨を、第1図の方位を右に九〇度回転し、棺床の中央を後円部の推定円の中心に重ねた位置にあったものと仮定しておくことにする(第6図)。この中央粘土土槨の推定位置は、写真13、14に写った粘土土槨とトロッコの線路の位置関係とも整合する。つまり、推定した墳丘の主軸方向とは微妙に角度がずれるものの、観音松古墳の

第一主体部も、加瀬白山古墳などと同じように、墳丘の主軸方向に合わせて構築されていたと考えていいことになる。

さて、中央粘土槨の深さについては、掘削範囲の西壁面が写っている写真15から推測できる。第1図によると、中央粘土槨西端部の粘土の範囲の幅は約3mであるため、写真15の粘土槨西端部幅と西壁高の比率から壁面の高さを計算すると、二・三mという数値が得られる。なお、この深さは、写真25の第三段階と第四段階の盛土の境界と一致するようにみえ、写真25に写っているブロックを含む薄い層が、中央粘土槨と関係している可能性が考えられる。

第1図によると、中央粘土槨には、南東コーナー付近に南側に突出する部分が見られるものの、長さおよそ一〇m、幅三m前後の長方形に近い範囲に粘土が広がり、その中央に長さ八・四m、幅一m前後の棺床が存在したことになっている。写真18にはその断面が写っており、これを見ると図に記された粘土の範囲の下に断面逆台形を呈する掘り込みがあり、そこに粘土を充填して棺床を形成していたことがわかる。

写真13、15及び18をみると、棺床部分の床面の両側に

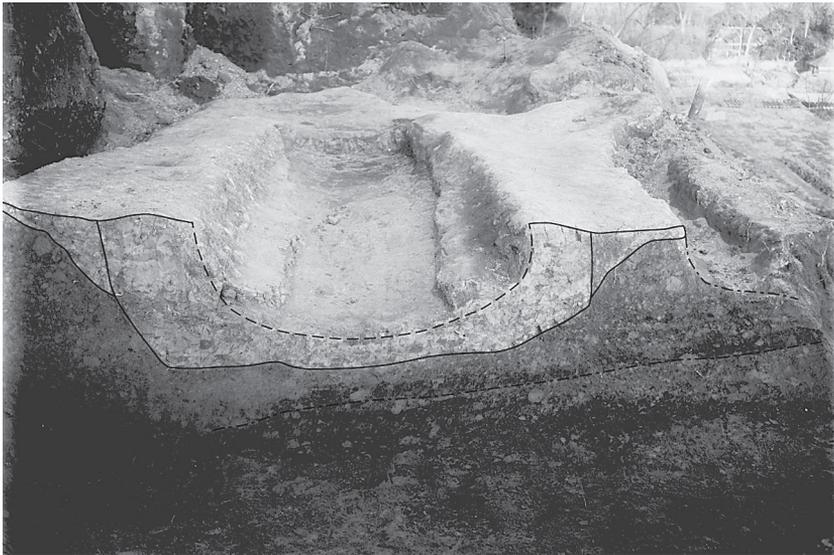


写真 28 中央粘土槨断面土層区分

段があり、全体的に床が浅く一段凹んでいる様子が写っている。ただし、この段は木棺の形態を示しているわけではなく、崩落した木棺被覆粘土と考えてよさそうである。写真18には、崩落した粘土の外側に本来の棺床のラインと思われる土層の境界が写っており、それと中央の遺物出土面のラインを結ぶと半円形に近い形になることがわかる(写真28)。このことから、中央粘土槨の木棺は、径1mほどの割竹形であったと推測することができ

る。一方、逆台形の掘り込みに充填された粘土をよくみると、写真28に示したとおり、その両側縁が、ほぼ垂直方向に分層できることがわかる。となると、中央粘土槨では、逆台形の掘り込みの床に粘土を敷いてから木棺を据え、木棺全体を厚く粘土で覆いつつ側面を垂直に整えただうえで、掘り込みの両側に粘土を詰めたか、あるいは、木棺を据えた後に、掘り込みの両側に粘土を詰めて垂直の壁をつくり、その粘土の壁と木棺の間に粘土を充填していったか、のどちらかということになる。

いずれにしても、観音松古墳の中央粘土槨では、棺床形成にあたり、まず断面逆台形の掘り込みを作ってから粘土を充填していたことは間違いなく、これは山本三郎

氏の粘土槨の分類のE類にあたり、粘土槨のなかでも数の多い類型ということになる(山本一九八三・四三八・四三九頁)。E類は、宮城県遠見塚古墳や福島県会津大塚山古墳をはじめ、東日本にも広くみられるが、一方で、隣接する加瀬白山古墳の後円部粘土槨は、平坦面に粘土を盛り上げて棺床を形成するD類に近いものになっている。この違いが時期によるものなのか、あるいは何らかの技術的な系統によるものなのかは、今後慎重に検討していく必要がある。

なお、今回発見された写真には、中央粘土槨についても、墓壙の有無を判断できる情報は含まれていないようである。写真18には、逆台形の掘り込みの下にロームブロックを多量に含む土層があり、その左側が逆台形の掘り込みに対応するように暗くなる様子が写っているが、これはこの断面観察用のサブトレンチを掘削した際の土が残っていたために、このようにみえているものと考えたい。

#### ・副葬品

第1図には、中央粘土槨の副葬品として、「鏡」、「紡錘車」、「勾玉」、「管玉(群)」、「小玉」、「銅鏃」、「刀」、

「斧頭」、「砥石」、「朱」、「アンペラ」、「鉄分」などの出土位置が記されている。

「鏡」(内行花文鏡・第3図、慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06)は、棺床の東端から二・七m、棺床の中心軸からやや北に寄った位置から出土した。図に鈕が描かれていることからすると、鏡面を下に向けていた可能性が高い。「紡錘車」(紡錘車形石製品)は、「鏡」の東に接して一点、「鏡」の西端から西方六五cmの位置でもう一点出土したことが記されている。ただし、第2図に描かれ、また研究室に残っているのは三点であり(慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06)、残念ながら、それら三点と第1図の出土位置との対応関係を明らかにすることはできなかった。

「刀」は二ヶ所に分かれて出土している。一ヶ所は「鏡」の西に接しており、短い三点の「刀」が描かれている。これらと先述の二つめの紡錘車形石製品の間には、「朱」が検出されたようである。もう一ヶ所は、「鏡」西端から西約一・五mの棺床中央やや南よりにあり、やや長い「刀」が二本並列するように出土したようである。その様子は写真13、15、17に写っている。いずれも鉄製であることは間違いなかるうが、全てが刀とは言い切れ

ず、劍、槍、刀子が含まれていた可能性もある。

玉類は、これら「鏡」から「刀」の範囲一帯から出土し、「鏡」の東、「朱」に接した場所、二ヶ所の「刀」の間、西側の「刀」の西、の大きく四ヶ所に分かれるようである。「鏡」の東のものは、「小玉」と記されているだけで、詳細は不明である。「朱」に接したものは、他と同じ「×」マークであるため玉類と判断したが、第1図に玉類に関わる記述があるわけではない。ただ、研究室に残る一連のガラス製小玉(慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06)のラベルに「朱下」とあるため、とりあえずこのガラス製小玉がこの位置から出土したものと考えるおくことにする。とはいえ、遺物のラベルには混乱がみられるため、「鏡」の東の「小玉」が、研究室に残る一連のガラス製小玉であった可能性も捨てきれない。

「刀」の間には、「管玉A」「管玉B」「管玉群C」「管玉D」「勾玉」と記された玉類がまとまっている。第2図には「中央槲第二群 碧玉美麗」と書かれた小型の管玉があるが、後述するように、第2図で「第三群」と記された管玉が、「刀」の西から出土したものであると考えられるため、この「第二群」の管玉は、管玉「A」(「D」のどこかから出土したものである可能性が高くな

る。なお第2図の「中央櫛曲玉硬玉製」と記された勾玉（慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06の硬玉製勾玉）は、この一群の最も北に描かれた「勾玉」に対応するものと思われる。

西側の「刀」の西のものは、第1図に「q管玉 大形1」と記されていることから、写真16・17に写った大型管玉を含む玉類の出土状態がこれに当たると考えてよさそうである。第2図に描かれた「管玉中央粘土櫛第三群」とある大型管玉が、この「大形1」とされたものということになる。第2図には、同じく「第三群」と記された管玉も描かれているが、これは写真16の大型管玉の右に六点まとまっている管玉（慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06の六点一連の管玉）の一つと考えられる。ただ、写真には、良く見ると六点の管玉に隠れるように、一点の勾玉が写っている。この勾玉は、管玉との大きさの比率、頭部の形態、孔の位置から、第2図の「出土部位不詳」と書かれたもの（慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06の小型の滑石製勾玉）で間違いなさそうであり、清水氏が実測図を描いた一九四六年までに、出土地点に関わる情報が見味になっていたことがうかがわれる。

「銅鏃」は、「鏡」の東約六〇cmの位置から三点まと

まって出土したようで、第1図に記された番号が、第2図の実測図の番号に対応しているものと思われる（慶應義塾ほか二〇〇九・写真5・06では、右がNo.1、左がNo.2、中央がNo.3である）。「銅鏃」の東には「砥石」が、その東には「斧頭」が存在し、「銅鏃」から「斧頭」までがひとつのまとまりとなっていた可能性が高い。写真19には、三点の「銅鏃」が中央よりやや右下に、左上には「砥石」が写っている。また写真20は「砥石」の出土状態のアップである。なお、第5図の清水氏のメモによると、「斧頭」は、袋状鉄斧であり、棺床より一段低い位置から刃先を東に向けた状態で出土したことがうかがわれる。

これらの副葬品群とは別に、棺床の東端付近から「アペンペラ」が、西端付近からは二ヶ所に分かれて「鉄分」が出土したと記録されている。これらがどのようなものであったか、具体的なことは不明であるが、「アペンペラ」は、加瀬白山古墳の粘土櫛でも出土しており注目される（三田史学会一九五三・三七頁）。

さて、第1図の副葬品の出土状況、及びその写真を見る限り、中央粘土櫛が盗掘を受けているような痕跡は認められず、副葬品は、いずれも副葬当初の位置をほぼ

保つていると考えてよさそうである。であれば、内行花文鏡の出土位置を被葬者の頭部とし、東頭位の被葬者を想定した場合、頭部から胸部に石製品、胸部付近に朱、頭部・胸部・足元に玉類、頭部上方に銅鏃・鉄製工具・砥石、側縁に鉄刀や鉄剣という配置となり、これは、東日本の前期後半における副葬品配置の標準的なあり方と評価することができる(丹治二〇〇三)。

ただ、ひとつ注意しておかなければならないのは、先述のとおり中央粘土槨では、崩落した被覆粘土を除去せずに、つまり棺床を全て検出する前に調査が終了していたことである。とすれば、一部の、特に縁辺部に配置されていた副葬品が未検出のままになっていた可能性を考えておかなければならなくなる。鉄斧が調査面よりも下から出土したことも、被覆粘土と関係しているのかも知れない。特に、棺床の両側縁に配置されることの多い、鉄刀・鉄剣は、もう何点か存在していた可能性があると考えておいたほうがいいだろう。

とはいえ、こうした点を考慮しても、東日本の前期大型前方後円墳における新事例として、今回明らかになった観音松古墳の中央粘土槨の副葬品配置の持つ意味は小さくないはずである。

c. もうひとつの主体部存在の可能性について  
清水潤三氏の一九五五年の文章では、観音松古墳主体部は、二つの粘土槨のみであり、それ以外には存在しなかった可能性が高いことが述べられている。しかし、今回発見された図に、もうひとつの主体部の存在を示唆する、気になる情報が含まれているため、ここで取り上げしておく。

気になる情報というのは、第2図の右下に描かれた「滑石製勾玉」、算盤玉、管玉と、そこに記された「東松株下」という文字である。「東松株下」という表記はここにしかないため、これが何を指示しているかは文字そのものから想像するほかない。一方で、第2図には「中央槨」「西」という記述がみられるわけであるから、これらの遺物が、それら二つの主体部以外から出土した可能性を想定することまでは許されるであろう。また、ここに「東」という文字が入っている以上、先述の方位の誤りからみて、中央粘土槨の北側で出土したと考えるのが妥当ということになる。「松株下」との文字からは、その位置が、今回の写真に写った主体部の調査範囲ではなく、その北側にあった松の根元であったことが想像される。

ただ、そう考えるには問題もある。第2図の「東松株下」とされた三点は、いずれも研究室において現物を確認することができるが、これらは、現在、ほかに滑石製勾玉一点、滑石製白玉一〇点、ガラス小玉二点と一連になつており、そこに「観音松古墳 中央塚遺物 第三群玉類」とのタグが付いているからである。

しかし、第2図の記述が正しければ、第三群玉類は、「刀」の西でままとまつて出土した写真16の一群であるから、問題の三点を含む一連の玉類が同じ場所から、それも写真には写らない状況で出土していたとは考えにくい。また、写真16に写った六個一連の管玉には、現在「K一九八」との遺物番号のタグが付いているが、問題の玉類のタグの裏にも同じく「K一九八」と書かれており、一方で、「K一九九」と書かれた、問題の玉類のものと考えられる（玉類の構成が記されている）別の札が存在する。いずれにしても、問題の玉類に関わる情報に混乱があることは間違いなく、であれば、第2図の三点、あるいはこれらを含む一連の玉類が、第2図のとおり「東松株下」から出土した可能性も充分に考えられることになる。

観音松古墳と時期的に近い千葉県大厩浅間様古墳の三

基の主体部は、いずれも木棺直葬であり（財）市原市文化財センター一九九九・第6図）、観音松古墳に後続する多摩川流域一帯の大型墳として著名な東京都野毛大塚古墳でも、追葬の第三、第四主体部は木棺直葬である（世田谷区教育委員会ほか一九九九・一一一～一二三〇頁）。こうした事例からみて、中央粘土槨の東にもうひとつ木棺直葬の主体部が存在し、その副葬品が「松株」の「下」から発見されたことを想定したとしても、あながち無謀とは言えないと考えている。

## 五 その他の遺構と遺物

今回発見された図と写真には、観音松古墳の築造前、築造後の遺構や遺物の情報も含まれている。なかには、観音松古墳が含まれる矢上台遺跡の研究において見逃すことのできない情報もみられるため、最後にそれらについても検討結果をまとめておきたい。

まず、観音松古墳より新しい遺構としては、中央粘土槨の南に接し、近世以降（おそらく近代）のものと思われる墓が検出されたことが記録されている。墳頂部のほぼ中央が墓地として利用されていたことを物語る興味深い遺構である。第1図によると、「大久保」と記された

墓誌、骨壺、鉄製品などが出土したようであり、中央粘土槨付近から検出されたことからみて、墳頂部から二m以上の深さに埋葬されていたことがわかる。写真22は骨壺と墓誌?の検出状況であるが、図と写真以外の情報がなく、残念ながら詳細については明らかにできなかった。

古墳以前のものとしては、墳丘断面の写真に写った盛土下の遺構群が注目される。写真25～27には、そうした墳丘下の遺構にも分層線を加えておいたが、その多くは、垂直に近い壁と平坦な床を持つことからみて、堅穴住居址と考えていい。

墳丘西端を写した写真26からは、四基の住居址と逆台形の断面をもつ遺構の存在が確認でき、逆台形の遺構の右側の落ち込みも住居址の可能性がある。写真25には、写真26の遺構群の東方に存在する、もう一基の住居址が写っているが、よく見ると、この住居址の覆土の中ほどに、床の硬化面と考えられる土層が写っており、さらに一基の住居址が重なっていたことが想定される。左右にも遺構らしき落ち込みがみられ、これらも住居址である可能性が考えられる。断面の東端を写した写真27でも、かなり大型になりそうな住居址が存在しており、その西にも、この住居址と重複する住居址らしき落ち込みが認

められる。

この墳丘断面の長さは五〇m程度であり、そこに八～一基の堅穴住居址を含む、これだけの遺構群が存在するわけであるから、地山部分より遺構のほうが多くなるほどの際立った遺構密度の高さということになる。これらの遺構は、覆土の暗さ(黒さ)、床面や壁の境界の明瞭さなどからみて、いずれも弥生時代以降のものである可能性が高く、一方で観音松古墳の墳丘下にあることから、前方後円墳時代以前であることも間違いない。

観音松古墳の存在する矢上台遺跡では、観音松古墳の西約一五〇mのテクノロジーセンター地点において、約一五〇〇mの調査範囲内から後期を中心とする五〇基以上の弥生時代中期～前方後円墳時代前期の堅穴住居址群が検出されている。また、西北西約三五〇mの一九五五年の調査地点でも、激しく重複した弥生時代後期の堅穴住居址群が発見されたことが記録されている(清水一九五九)。今回の写真の発見によつて、少なくとも矢上台の東半分では、同じような高い密度で、弥生時代中期～前方後円墳時代前期の遺構群が存在していた可能性が高くなった。この点は、今後の矢上台遺跡の評価、特に観音松古墳の出現基盤としての評価において、大きな意味

をもつことになると考えられる。

さて、最後に、写真23の弥生式土器と須恵器について触れておく。弥生式土器は、所謂久ヶ原式の範疇に入るものであるが、太頸の器形や胴部の明瞭な縦ミガキは、久ヶ原式としては特異である。単斜縄文であることからみても、朝光寺原式や吉ヶ谷式との関係を想定しておくべきかも知れない。一方の須恵器は、口頸部が長く、肩に明瞭な稜があり、稜以下がやや深く丸みを帯びた胴部となる平瓶で、七世紀のものである。これらの遺物については、記録がないだけでなく、現物も確認できていないため、「日吉 観音松古墳二」の箱のなかに写真が存在していたということ以外、積極的に観音松古墳との関係の評価することはできない。もちろん、矢上台遺跡という目で眺めれば、弥生式土器は墳丘下あるいは台地全体に展開する弥生時代の遺構群から、須恵器は、テクノロジーセンター地点でも多数検出されている前方後円墳時代後期の住居址、あるいは台地斜面の横穴墓から出土したものである可能性が想定できなくはないが、これ以上の推測は控えるべきであろう。

### おわりに

以上、新たに発見されたガラス乾板と図面にに基づき、観音松古墳の墳形、墳丘構築方法、主体部の規模や形態、副葬品出土位置等を検討してみた。今回、「研究1」の時点では手がかりのなかった前方部南辺の位置を特定し得る情報が見つかり、破壊前の墳丘の平面形をほぼ正確に復元できたことは非常に幸運であったし、一〇〇m規模の前方後円墳としては他に例をみない後円部中央付近の断面写真の存在により、後円部の構築方法の一端を明らかにできたことや、写真と主体部のトレース図から、観音松古墳の主体部、特に中央粘土槨の詳細を明確にできたことは、観音松古墳のみならず、今後の東日本の前方後円墳時代研究においても重要な成果になったと考えている。

加えて、主体部に関しては、写真によって、南粘土槨の位置やその簡素な構造をある程度把握できただけでなく、中央粘土槨の北にも木棺直葬に近い主体部が存在していた可能性を指摘し得た。これらも地味ながら観音松古墳の評価と絡む重要な成果と言っていいたいだろう。さらに、観音松古墳構築以前のものではあるが、矢上台遺跡

の東端付近における弥生時代〜前方後円墳時代前期の遺構密度の高さが確認されたこと、つまり矢上台遺跡の実態に関わる手がかりが得られたことも、観音松古墳出現の背景を考察するうえで、大きな意味をもつ成果になったはずである。

清水潤三氏は、戦前を中心とした日吉一帯の遺跡群の調査成果をまとめた文章の冒頭で、「日吉は我国考古学史上、不朽の名をとどめることとなった」(清水一九五五・一頁)と高らかに宣言している。私も、日吉一帯の遺跡群に関わるようになって、その弥生時代〜前方後円墳時代研究における重要性を確信するに至っているが、残念ながら、戦災で遺物や記録の多くが失われたことや、少なからぬ調査成果が未報告に留まることが災いし、戦後の日吉一帯の遺跡群の研究は、清水氏の宣言から想像されるほど順調には進んでこなかった。

筆者が日吉一帯の遺跡群の研究を志したのも、こうした現状を鑑みてのことであるが、とりわけ観音松古墳は、墳長一〇〇mクラスの大型前方後円墳という、遺跡群の評価の核となる遺跡でありながら、あまりに不明な点が多かったために、長らく研究の俎上に上がることがなくなってしまうていた。

その観音松古墳も、「研究Ⅰ」や本稿の成果によって、ようやく他の古墳との比較が可能な研究対象にまで引き上げることができてきたようである。これは日吉一帯の遺跡群の研究における大きな前進と言っていいだろう。

次なる課題は、出土遺物の紹介と検討ということになるが、観音松古墳の出土遺物については、記録に残っていないながら、依然所在をつかめていない遺物もある。今後は、これまで以上にそうしたものの確認を急ぎ、できるだけ早く出土遺物の検討結果を報告したいと思っている。

本稿を草するにあたり、佐伯史子氏、日高慎氏にお世話になりました。記して謝意を表します。

本研究は、慶應義塾大学日吉キャンパス二〇一二年度・二〇一三年度調整予算プロジェクト「日吉台地を中心とする台地遺跡群(先史〜近現代)の調査とGIS分析」(研究代表者・文学部教授高山博)の成果の一部を含んでいる。

#### 引用・参考文献

青木敬 二〇〇三『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』六一書房

青木敬 二〇一三「墳丘構築技術にみられるふたつの画期」『東国の考古学』群馬考古学研究会 六一書房 八一—一〇〇頁

安藤広道 二〇〇九「観音松古墳の研究―墳丘及び墳丘外施設の復原―」『史学』第七八巻第四号 三田史学会 八三―一二五頁

安藤広道 二〇一四「水田中心史観批判」の功罪」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一八五集 四〇五―四四八頁

(財) 市原市文化財センター 一九九九「市原市大厩浅間様古墳調査報告書」財団法人市原市文化財センター調査報告書第四二集

大阪府教育委員会 二〇〇一『唐櫃山古墳』大阪府埋蔵文化財調査報告二〇〇一―九

京都大学文学部考古学研究室 一九九三『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第六冊

慶應義塾・神奈川県立歴史博物館 二〇〇九『福澤論吉と神奈川』

小池勝典 二〇〇六「墳丘構築法から見た越後の前期・中期古墳―南魚沼市飯綱山古墳群を中心として―」『電子考古学』第二号 一―三四頁

清水潤三 一九五五「日吉に於ける考古学研究史」『Archaeology』一一号 慶應義塾高等学校考古学研究会 一―六頁

清水潤三 一九五九「神奈川県横浜日日吉遺跡」『日本考古学年報』八 日本考古学協会 七九頁

逗子市教育委員会・葉山町教育委員会 二〇〇九「国指定史跡長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査概要報告書…(平成18年度)平成20年度)」

世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会 一九九九『野毛大塚古墳』

丹治篤嘉 二〇〇三「東北・関東地方における前期古墳の副葬品配列」『行政社会論集』第一五巻第三号 福島大学行政社会学会 二七―六八頁

樋口吉文 一九九七「古墳築造考」『堅田直先生古稀記念論文集』

広瀬和雄 一九九二「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』二四―二六頁

房総考古資料刊行会 一九七四『市原市菊間遺跡』三田史学会 一九五三『日吉加瀬古墳―白山古墳・第六天古墳調査報告―』考古学・民俗学叢刊第二冊

向日市教育委員会・(公財) 向日市埋蔵文化財センター 二〇一四「元稻荷古墳」向日市埋蔵文化財調査報告書第一〇一集

山城町教育委員会 一九八六「椿井大塚山古墳」

山本三郎 一九八三「畿内地域における前期古墳の複数埋葬について」『考古学論叢 関西大学考古学研究室開設参拾周年記念』関西大学文学部考古学研究室 四三五―四六四頁

#### ※「研究1」正誤表

「研究1」では、原稿作成時の不手際と校正時の手違いに

